

各関係機関団体の長  
各病虫害防除員  
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成21年度病虫害発生予報第5号(8月)について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

## いもち病の発生に注意しましょう！

本年は、梅雨が長引いて降雨や曇天日が続き、イネいもち病の発生に好適な条件となっています。葉いもちの防除を怠ると穂いもちの発生が多くなるので、ほ場をよく観察し、発生初期の薬剤防除を徹底しましょう。



葉いもちの症状  
< 進行型 >



穂いもちの症状  
< 白穂(不稔穂) >

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は、以下のとおりです。

平年に比べ、晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の気温は平年並か低いでしょう。降水量は平年並か多く、日照時間は少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並で、2週目は低く、3～4週目は平年並でしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	40	40	20
降水量	20	40	40
日照時間	50	30	20

(福岡管区气象台 21年7月24日発表抜粋)

予報第 5 号

向こう 1 か月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病 (葉いもち・穂いもち)	やや少	やや多	やや多
	紋枯病	少	少	並
	トビイロウンカ	並	並	やや多
	コブノメイガ	少	少	並
	斑点米カメムシ類	やや少	やや少	少
大豆	ハスモンヨトウ	やや少	やや少	やや少
かんきつ	黒点病	並	並	並
	ミカンハダニ	並	並	並
なし	ナシヒメシンクイ	並	並	並
ぶどう	べと病	並	やや多	並
かき	炭疽病	少	やや少	並
	フジコナカイガラムシ	やや少	やや少	やや少
	ハマキムシ類	やや少	やや少	やや少
果樹共通	カメムシ類	やや少	-	やや少
茶	炭疽病	並	やや多	多
	輪斑病	少	並	多
	カンザワハダニ	少	少	少
	チャノコカクモンハマキ	多	並	並
	チャノホソガ	やや少	少	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多	並
	チャノキイロアザミウマ	少	並	並
イチゴ	炭疽病	やや少	やや少	やや多
	ハダニ類	並	並	並

注) 果樹共通カメムシ類の発生量(現況)は、前年比

夏季の異常気象(長雨、日照不足)と農作物の生育及び病害虫管理について

本年は、梅雨入り後、断続的な降雨や曇天日が続き、日照不足から農作物が軟弱徒長気味に生育している。

このことから、今後の気象予報や病害の発生に十分注意し、迅速かつ適切な防除指導をお願い致します。

## 作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

### 【普通作物 - 水稻】

#### 1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

##### （1）予報の内容

発生量：平年及び前年よりやや多

##### （2）予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（ - ）。

発病株率 3.1%（平年 5.4%、前年 4.8%）

イ 7月2日半旬調査の結果、山間部で一部多発生ほ場が認められた（ + ）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている（ + ）。

##### （3）防除上の注意

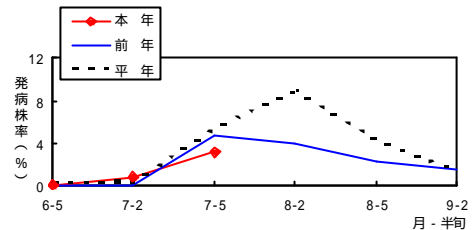
ア 梅雨が長引いて降雨や曇天の日が続き、本病の発生に好適な条件となっている。

葉いもちが発生しているほ場では、薬剤防除を徹底するとともに、適切な肥培管理に努める。

イ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、剤型によって散布時期が異なるので注意する。粉剤は出穂前、粒剤は出穂2週間前に処理する。

ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

エ 薬剤は「平成21年度普通作物病害虫・雑草防除の手引き」を参照する（以下の病害虫についても同様）。



普通期水稻における葉いもちの発生推移

#### 2 紋枯病

##### （1）予報の内容

発生量：平年より少、前年並

##### （2）予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（ - ）。

発病株率 0.01%（平年 1.28%、前年 0.33%）

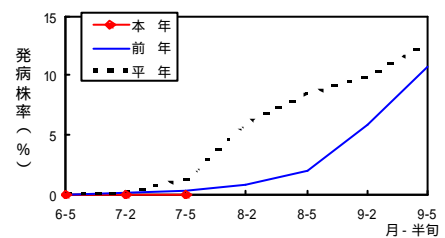
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている（ - ）。

##### （3）防除上の注意

ア 出穂期以降に上位葉へ病斑が進展するのを防ぐため、発生ほ場では防除を実施する。粉剤は出穂10～14日前の防除効果が高い。

イ 粒剤は薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので、使用基準を確認する。

ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。



紋枯病の発生推移

### 3 トビイロウンカ

#### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

10株当たり成幼虫数 0.3頭(平年 0.2頭、前年 0.1頭)。

イ 県下5地点の予察灯による7月4日半旬までの誘殺

虫数は、2頭(平年 20.5頭、前年 3.0頭)と少なかった(-)。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低いとされている(-)。

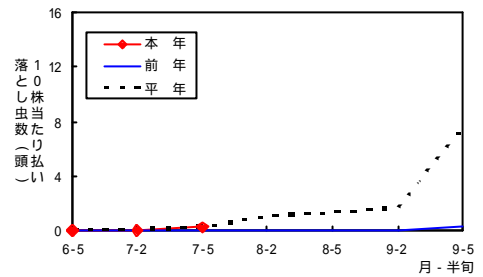
#### (3) 防除上の注意

ア 発生初期には低密度でも急激に増加するため、必ずほ場での発生状況を把握する。

イ 本年は6月末～7月末に4回程度飛来が認められているので、発生パターン図を参考に適期(若齢幼虫発生期)に防除を行う(平成21年7月30日付「速報第5号」参照)。

ウ 箱施薬剤が施用されたほ場でも、効果がなくなっている場合があるため、発生状況を十分に把握する。

エ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤が株元に十分かかるように丁寧に散布する。



トビイロウンカの発生推移

### 4 コブノメイガ

#### (1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

食害株率 1.8%(平年 7.1%、前年 2.7%)

30㎡当たり払い出し成虫数

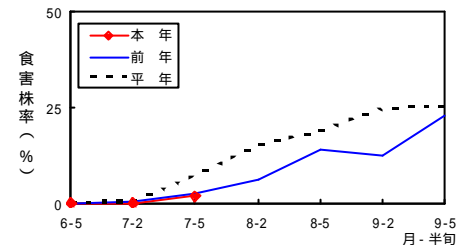
0.03頭(平年 0.4頭、前年 0.1頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低いとされている(-)。

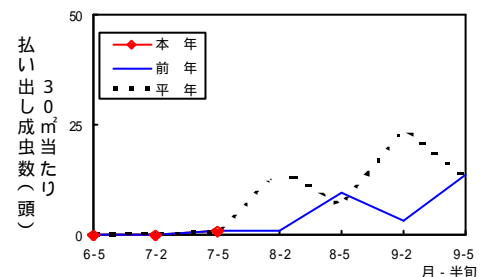
#### (3) 防除上の注意

ア 本種はトビイロウンカと同時期に飛来していると考えられるので、発生パターン図(平成21年7月30日付「速報第5号」参照)を参考にトビイロウンカと同時防除を行う。

イ コブノメイガの防除適期は粉剤の場合、発蛾最盛期から1週間後である。



コブノメイガの発生推移



コブノメイガの払い出し成虫数の発生推移

### 5 斑点米カメムシ類

#### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬における雑草地での20回すくい取り調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

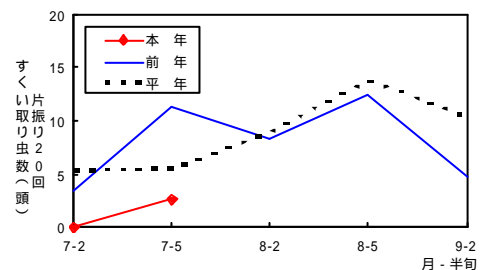
主要3種カメムシ類(ケハカメムシ、ホハリカメムシ、シホカメムシ類) 2.6頭(平年 5.5頭、前年 11.4頭)

カスミカメ類 26頭(平年 24頭、前年 34頭)

ミナミアオカメムシ 0.03頭(過去5か年平均 0.03頭、前年 0.16頭)

イ 県下5地点の予察灯における7月4日半旬までの誘殺虫数は、平年よりやや少なかった(-)。

ミナミアオカメムシ 95頭(過去5か年平均 73頭、前年 221頭)



雑草地における主要3種(ケハカメムシ, ホハリカメムシ, シホカメムシ)のカメムシの発生推移

アカスジカスミカメ 683頭（過去5か年平均  
1,235頭、前年1,667頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か  
低いとされている（-）。

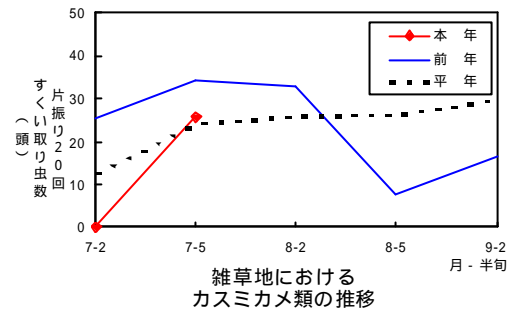
(3) 防除上の注意

ア 畦畔や休耕田などの草刈を徹底し、出穂期2週  
間前までに終了する。

イ 防除適期は、穂揃期及びその7～10日後であ  
る。

ウ 出穂期の早いほ場では集中的に加害される恐れがあるため、発生状況に注意する。

エ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルフェン剤の防除効果が低いので、効果の高い  
クロチアニジン剤またはジノテフラン剤等を使用する。



【普通作物 - 大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 筑紫野市の7月1半旬～5半旬のフェロ  
モントラップにおける誘殺虫数は376頭  
（平年638頭、前年546頭）とやや少な  
かった（-）。

イ 7月5半旬調査の結果、一部のほ場で白変葉の発生が認められた（+）。

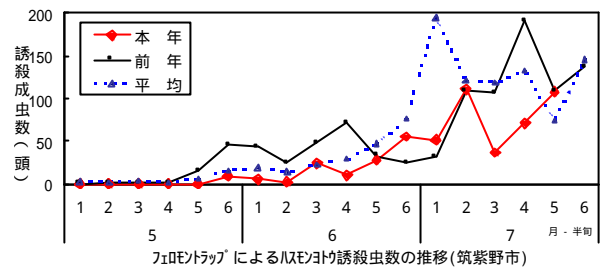
ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並かやや低く、降水量は平年並か多いとされて  
いる（-）。

(3) 防除上の注意

ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。

イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。

ウ 防除適期は、フェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって差が  
あるので、若齢幼虫の食害で生じる白変葉の発生状況を必ず確認する。



【普通作・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
普通期水稲 セジロウンカ	やや多	並	やや多	

【果樹】

1 かんきつ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.7% (平年 2.0%、前年 1.0%)

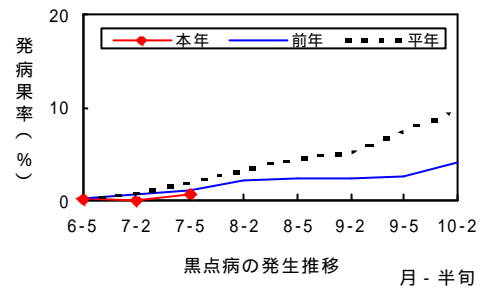
発生ほ場率 54.5% (平年 33.3%、前年 31.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる枯れ枝は除去する。

イ 前回の散布から1か月後、または積算降水量250mmを目安に防除を実施する。



2 かんきつのみかんハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 12.8% (平年 12.6%、前年 18.9%)

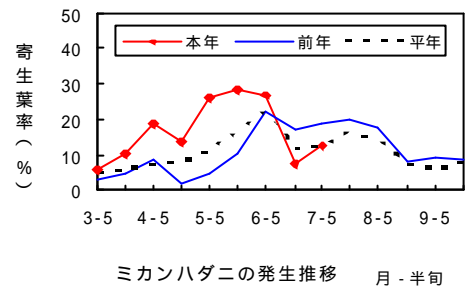
発生ほ場率 63.6% (平年 58.1%、前年 75.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(-)

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 なしのナシヒメシンクイ

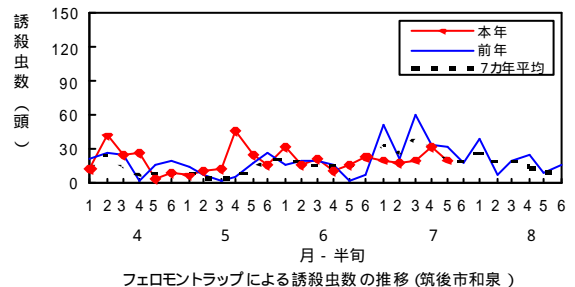
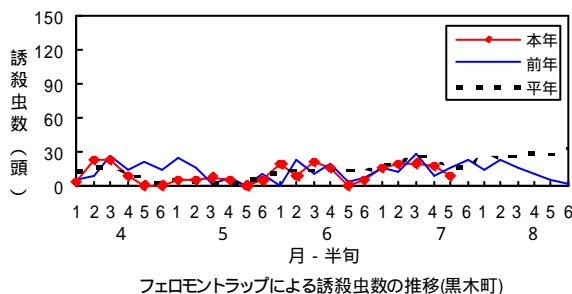
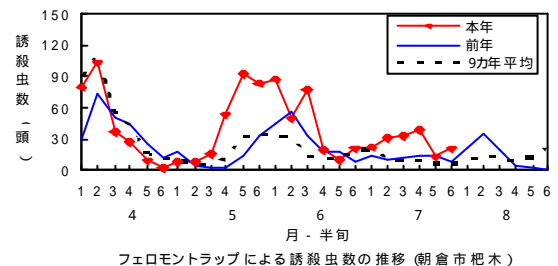
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月1～5半旬までのフェロモントラップの誘殺数は、平年並であった(±)。

県内3か所の平均 110頭 (平年 105頭、前年 117頭)



イ 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害果率 0.5% (平年 0.4%、前年 0.8%)

発生ほ場率 20.0% (平年 22.6%、前年 58.3%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(±)。



(3) 防除上の注意

ア 8月上～中旬頃の発蛾最盛期直後に防除を行う。

防除後も成虫が多く見られる場合は、7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食入加害するので、防除に当たっては、果実に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 防除に当たって収穫期に入る品種は、薬剤の選定など農薬使用基準を遵守する。

4 ぶどうべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

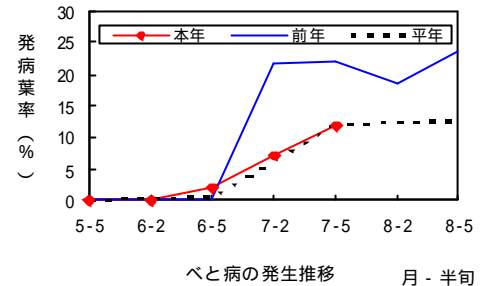
(2) 予報の根拠

ア 7月5 半月調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 11.8% (平年 12.0%、前年 21.8%)

発生ほ場率 88.9% (平年 67.9%、前年 76.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(+ )。



(3) 防除上の注意

ア 梅雨明けが遅れており、発生が増加している園が多いので、薬剤防除を徹底する。

イ ボルドー液は、降雨直後や散布直後の降雨で、薬害が発生するので注意する。

5 かき炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5 半月調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

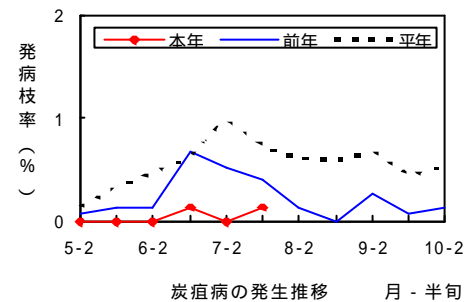
発病枝率 0.1% (平年 0.7%、前年 0.4%)

発生ほ場率 7.1% (平年 25.6%、前年 20.0%)

発病果率 0.1% (平年 0.5%、前年 0.1%)

発生ほ場率 7.1% (平年 23.1%、前年 6.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(+ )。



(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病枝及び罹病果は除去する。

イ 台風等の強風雨が予想される場合や、罹病枝の多い園、本病に弱い品種(早秋)では、薬剤防除を徹底する。

6 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

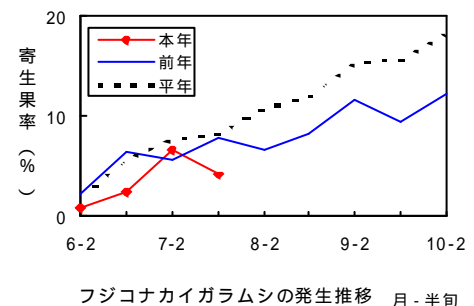
(2) 予報の根拠

ア 7月5 半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

寄生果率 4.1% (平年 8.1%、前年 7.9%)

発生ほ場率 78.6% (平年 74.9%、前年 80.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(-)。



(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除の効果が最も高いのは若齢幼虫期であるが、第2世代以降は齢期が乱れているので、園内をよく観察して適期防除を実施する。

イ 防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 合成ピレスロイド系剤は、天敵類に悪影響を及ぼすので、カメムシが飛来している場合を除き使用を控える。

## 7 かきのハマキムシ類

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

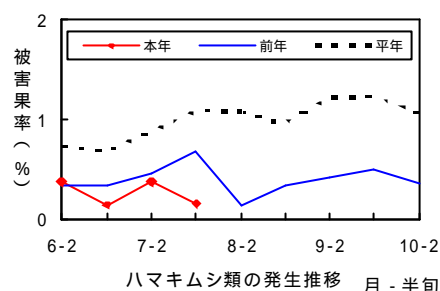
被害果率 0.2% (平年 1.1%、前年 0.7%)

発生ほ場率 21.4% (平年 49.1%、前年 40.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

### (3) 防除上の注意

防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



## 8 果樹共通のカメムシ類

### (1) 予報の内容

発生量：前年よりやや少

### (2) 予報の根拠

ア ヒノキの球果量はやや少であった(-)。

イ 7月5半旬における県下25か所のヒノキ球果のピーティング調査の結果、主要3種類のカメムシ類の頭数は、1地点当たり13.3頭(筑後支所管内 16.0頭)で、前年並の13.5頭(筑後支所管内 25.3頭)であった(±)。

ウ 予察灯における主要3種の県下6か所の平均誘殺数は264頭(前年 250頭)で、前年並であった(±)。

エ 7月5半旬調査の結果、一部のなし園で被害果が認められたものの、県下全体の被害果率は少なかった(-)。

なし 被害果率 0.1% (平年 0.9%、前年 0%)

かき 被害果率 0% (平年 0.7%、前年 0.1%)

オ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

### (3) 防除上の注意

ア ヒノキ球果の口針鞘数調査の結果から、新成虫がヒノキから離脱し果樹園へ多く飛来する時期は、県平均では8月30日頃(筑後支所管内は8月24日頃)と予想される。

イ 常習発生地やスギ・ヒノキ林に近接する園地では、早い時期からの飛来(平成21年7月30日付「技術第3号」参照)が考えられるので、果樹園内の見回りを強化し、園内への飛来や果実の落果等の異常を認めたら、薬剤防除を行う。

ウ 樹種によって使用できる薬剤が異なるので、使用基準・使用回数等を遵守する。

## 【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況 (平年比)	発生予報		防除上注意すべき事項等
		(平年比)	(前年比)	
なし ハダニ類	やや少	やや少	やや少	多発すると防除が困難になるので、発生 の少ない時期の防除を徹底する。
かき うどんこ病	やや少	やや少	並	葉裏にかかるよう丁寧に散布する。 発生が多い園では、8月上～中旬の防除 を徹底する。
柿 ハダニガ	並	並	並	



## 【茶】

### 1 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(+)。

発病葉数 2.8葉(平年 2.5葉、前年 0.1葉)

発生ほ場率33.3%(前年 8.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(+)

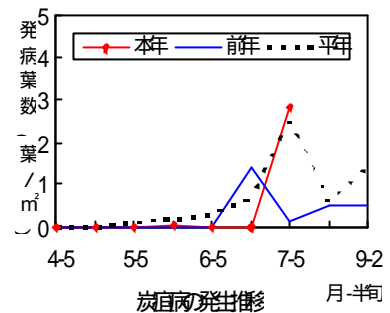
#### (3) 防除上の注意

ア 摘採・整枝後等の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

特に、最終摘採後の新芽(秋芽)に対する防除を徹底する。

イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前の薬剤防除の効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



### 2 輪斑病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病葉数 0.02葉(平年 0.20葉、前年 0.26葉)

発生ほ場率 6.7%(前年12.5%)

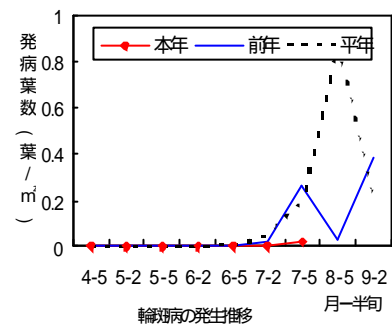
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(+)

#### (3) 防除上の注意

ア 病原菌は、葉や茎の傷口から侵入感染するため、三番茶摘採又は刈落とし当日か、翌日に防除を行う。

イ 台風等の強い風雨の後では、葉や茎の傷口の増加によって、感染が急速に拡大する場合がありますので、降雨後速やかに(翌日までに)防除を行う。

ウ 発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。



### 3 カンザワハダニ

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生葉率 0%(平年 0.5%、前年 1.3%)

50葉当たり虫数 0頭(平年 0.7頭、前年 1.9頭)

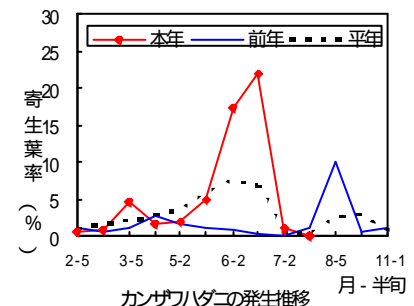
発生ほ場率 0%(前年 29.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(-)

#### (3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



#### 4 チャノコカクモンハマキ

##### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

被害葉数 1.2葉 (平年 0.5葉、前年 0.7葉)

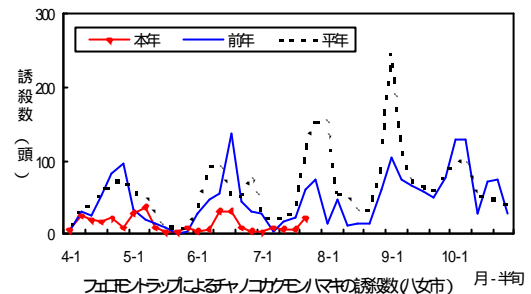
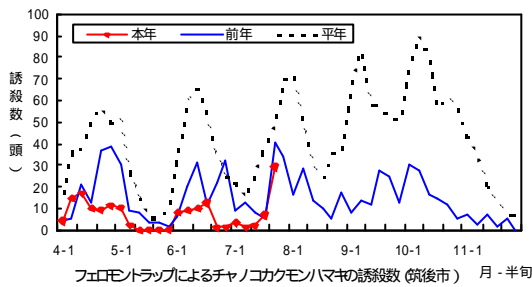
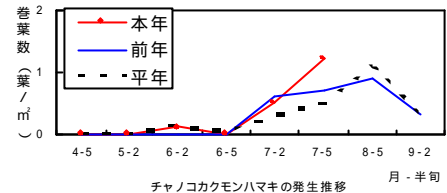
発生ほ場率 53.3% (前年 33.3%)

イ 7月1半旬から7月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は、平年より少なかった(-)。

筑後市 42頭 (平年 150頭、前年 75頭)

八女市 44頭 (平年 217頭、前年 128頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(±)。



##### (3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、8月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多い時から7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行う。

#### 5 チャノホソガ

##### (1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月1半旬から7月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は、平年よりやや少なかった(-)。

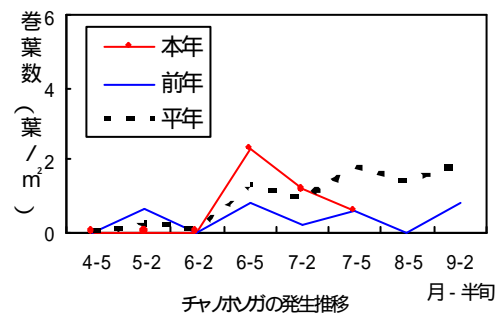
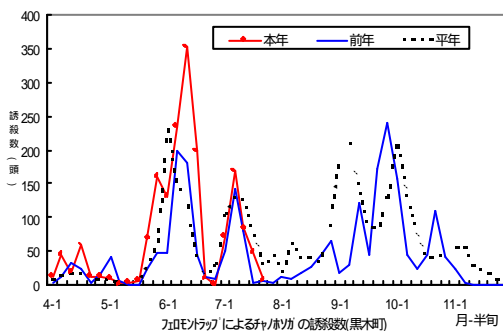
黒木町 384頭 (平年 464頭、前年 284頭)

イ 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

被害葉数 0.6葉 (平年 1.8葉、前年 0.6葉)

発生ほ場率 26.7% (前年25.0%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(±)。



(3) 防除上の注意

- ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、8月中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多い時から7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行う。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

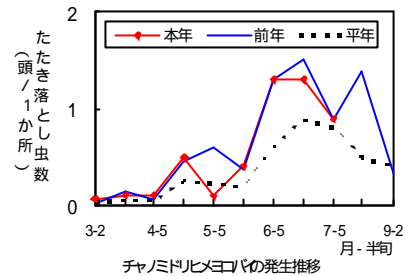
叩き落とし虫数 0.9頭 (平年 0.8頭、前年0.9頭)

発生ほ場率 53.3% (前年 75.0%)

- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア A4版の白紙上での叩き落としで、4頭以上の場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
- ウ 効果が高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



7 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

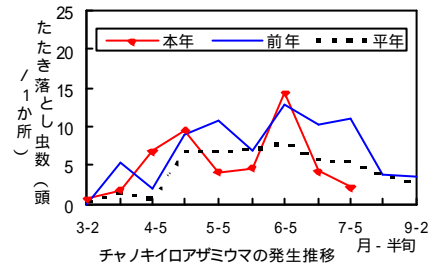
叩き落とし虫数 2.1頭 (平年 5.3頭、前年11.0頭)

発生ほ場率 73.3% (前年 100%)

- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア A4版の白紙上での叩き落としで、10頭以上の場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜】

1 イチゴ(育苗期)炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 7月2半旬に苗の下位葉を採集し、エタノール検定を行った結果、潜在感染株率は過去3か年平均よりやや低かった(-)。

潜在感染株率 13.3% (前年 20.8%、過去3か年平均 19.7%)

潜在感染株確認ほ場率 71.4% (前年 70.0%、過去3か年平均 64.0%)

- イ 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病株率 0.05% (平年 0.8%、前年0%)

- ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア エタノール検定では、潜在感染株率は前年よりやや低いですが、その後、豪雨が続いたため感染の拡大が懸念される。罹病株は感染源となり、降雨等により急速に蔓延するので、発病を確認した苗及び周辺の苗は速やかに持ち出し処分する。

イ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、葉かぎ作業直後や降雨前後に予防散布を行う。

ウ 夜冷短日や低温暗黒などの処理は、株へのストレスによって発生を助長するので、感染が疑われる苗は使用しない。

また、株冷入庫の際には、苗を詰めすぎないように注意する。

エ 雨よけ育苗等で風通しが悪く、多湿になると発生しやすいので、通風を図る。

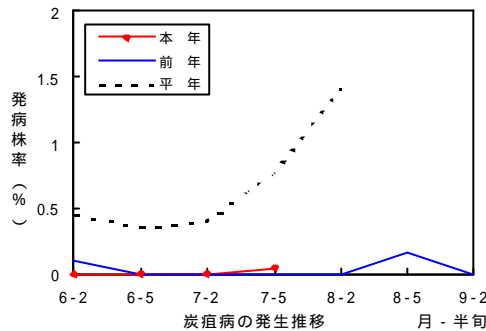


表 イチゴ炭疽病 潜在感染株調査 (単位: %)

調査地点		本年	前年
本所	前原市	15	20
	福津市	10	0
	久留米市田主丸町	25	0
	久留米市宮ノ陣町	5	0
	筑前町	20	25
	嘉麻市	0	-
	飯塚市	5	-
	福智町	25	0
	八女市	0	10
	筑後市	-	20
筑後支所	大川市	0	0
	大木町	15	5
	黒木町	5	5
	広川町1	0	10
	広川町2	0	0
	みやま市高田町	0	15
	岡垣町1	20	80
行橋支所	岡垣町2	20	50
	行橋市	15	35
	豊前市1	10	50
	豊前市2	25	15
	みやこ町豊津	65	75
	潜在感染株率	13.3	20.8
潜在感染株確認ほ場率	71.4	70.0	

注1 調査地点は、イチゴ育苗期定点調査ほ場21カ所  
1地点20株、1株当たり下位葉2～3枚を採取

注2 検定手順

- (1) 検定葉を70%エタノールの30秒浸漬後、水洗
- (2) 殺菌水で湿したろ紙を敷いたシャーレに検定葉を収め、恒温器に静置(25℃設定)
- (3) 2週間後に検鏡し、炭そ病菌を確認

## 2 イチゴ(育苗期)のハダニ類

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 6.5% (平年 5.9%、前年 7.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

### (3) 防除上注意すべき事項

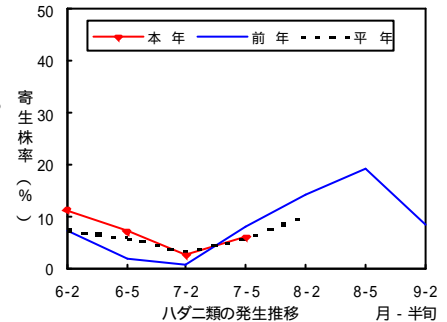
ア 多発後は防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。

イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ、密封し処分する。

ウ 夜冷短日や低温暗黒などの処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、ハダニを持ち込まないようにする。

エ 本ほ場で天敵を利用する場合、育苗後半は天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。

オ ほ場内や周辺の除草を徹底する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	やや少	やや少	並	<p>過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。</p> <p>夏季の薬剤散布は、日中を避け、夜間、葉に水滴が残らない時間に散布する。</p> <p>8月以降発生が多くなるので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。</p>
アザミウマ類	並	並	並	
鱗翅目害虫 (ハモトウ、 材外コガ)	並	並	並	
野菜共通 コナジラミ類	並	並	並	<p>野外（筑後市）に設置したトマト苗トラップによる捕獲数は平年並である。</p> <p>今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと。</p>
<p>捕獲頭数 (頭)</p> <p>トマト苗トラップでのタバココナジラミ類捕獲頭数の推移 (筑後市)</p>				

## 農薬の危害防止に努めましょう ～6月から8月は「農薬安全使用運動」実施期間です～

福岡県では農薬の使用機会が多い6月から8月を「農薬安全使用運動」の実施期間としおります。

農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮等法令で定める遵守事項について周知徹底をお願いします。

散布者の安全はもちろん、人畜、隣接作物、河川等への配慮についてご指導よろしくをお願いします。

### 農薬安全使用運動重点啓発事項

散布前に必ず農薬ラベルを確認  
(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数)

散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止対策を徹底

- ・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
- ・飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
- ・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意

水田除草剤では止水期間(1週間程度)を厳守

- ・水田において農薬を使用するときは、止水期間を1週間程度とし、落水・かけ流しをしない。

散布後は必ず散布器具(タンク、ホース等)を洗浄

防除履歴の正確な記帳

- ・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4704204.html>  
電子メール [kfok0301@sp.jpfn.ne.jp](mailto:kfok0301@sp.jpfn.ne.jp)